

1. 背景とねらい

本県では重点花き品目のひとつとして小ぎくの生産振興を進めているところである。作付を拡大するためには優良品種の導入とともに生産面では収量の向上を図ることが重要である。

近年育成されている小ぎく品種はスプレーギク型の草姿を持つものが多く、従来の仏花中心の需要だけでなく、フラワーアレンジメントや日常的装飾用等にも広く用いられ、需要は拡大してきている。

一方、これらの品種は側枝が比較的短いことから、栽培面では密植への適応性が高いと考えられる。そこで、従来の1条植えに対し、2条植えによる密植栽培について検討したところ、品質を維持しながら収量を確保できることが確認されたので指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

(1) 2条植え栽培法

ア. 栽植様式

2条植えの栽植様式はうね幅150cm、条間40~45cm、株間10cmとする。これにより10a当りの栽植株数は13,333株で、慣行1条植え(うね幅100cm、株間10cm;栽植株数10,000株)に対し、3割強の密植となる。

イ. 培土の省略と黒マルチ利用による雑草抑制

1条植えでは生育促進のため除草を兼ねて培土を行うが、2条植えでは無培土でも生育量を確保できることから、土寄せを省略することができる。なお、雑草抑制には黒マルチ被覆が有効である。その際、黒マルチ利用による生育や切花品質への影響はみられない。

ウ. 施肥量

窒素施肥量は、マルチ被覆の有無に関係なく10a当り10kgを基準とし、地力に応じ加減する。

(2) スプレーギク型小ぎく品種の2条植えにおける切花品質の特徴

ア. 生育期間が短く、生育量が不足しやすい8月咲き品種では、2条植えのほうが1条植えより草丈が長くなるものが多く、切花長確保に有効である。

イ. 生育量の旺盛な9、10月咲き品種においても2条植えの密植条件に起因する草姿の乱れや病害等の発生はみられない。

ウ. 切花品質に関わる形質(切花長、分枝数、花数など)について、1条植え・2条植えによる変動差はみられない。すなわち、1条植えに比べ品質を損なわずにより多くの切花本数を確保することができる。

(3) 適応地域および適応作型

県下全域;露地栽培

3. 指導上の留意事項

- (1) 仕立て方は慣行1条植えと同様、株当たり3本仕立とする。
- (2) 定植遅れは切花長など生育量不足につながる。逆に早すぎると、過繁茂によって草姿を乱したり、下葉枯れを生ずるなど切花品質を著しく損なうことがある。特に2条植えでは密植となるため、後者の悪影響が強く出やすい。そこで、品種に応じた適期内定植に努める。その目安として、県中南部における供試品種の切花品質からみた定植適期および特性について以下の表にまとめた。

供試品種の定植適期と開花時期および切花品質

ア 8月咲き品種

品種名(花色)	定植時期	開花時期	切花長(cm)	花房形
夕涼み(白)	4月下～5月上旬	8月上～中旬	85～90	円錐(凹)
なぎさ(白)	4月下旬	8月中旬	75～80	平～円筒
山水(白)	4月下旬	8月中旬	90	円筒～円錐
鈴子(黄)	4月下旬	7月下～8月上旬	75～80	円錐
まなざし(黄)	4月下～5月上旬	8月下旬	80～90	平(凹)
翁丸(黄)	5月上～中旬	8月下旬	90～100	平(凹)
のぞみ(黄)	5月中旬	8月下旬	95～100	円筒～円錐(凹)
てまり(桃)	4月下～5月上旬	8月上～中旬	80～90	円錐(凹)
花車(桃)	4月下～5月上旬	8月上～中旬	80～90	円筒
さんご(赤)	4月下～5月上旬	8月中旬	80～90	円錐(凹)

イ 9月咲き品種

品種名(花色)	定植時期	開花時期	切花長(cm)	花房形
白草(白)	5月下～6月上旬	9月上旬	80～95	平～円筒
白すずめ(白)	5月下～6月初旬	9月上～中旬	80～95	平～円錐(凹)
白鳩(白)	5月下～6月上旬	9月下旬	80～90	円筒～円錐
小鈴(黄)	5月下～6月初旬	9月上旬	80～95	平(凹)
星つづり(黄)	5月下～6月上旬	9月上～中旬	80～85	平(凹)
セガノ(赤白)	5月下～6月上旬	9月中旬	80～90	円錐(凹)

ウ 10月咲き品種

品種名(花色)	定植時期	開花時期	切花長(cm)	花房形
青空(白)	6月上～中旬	10月上旬	90～100	平～円筒(凹)
白丸(白)	6月上～中旬	10月中旬	110～130	円筒～円錐
玉虫(黄)	6月上～中旬	10月中旬	95～95	円筒
花小道(桃)	6月上～中旬	10月中旬	90～100	円錐(凹)
紅車(赤)	6月上～中旬	10月上旬	90～100	平～円錐(凹)
夕映(赤)	6月上～中旬	10月上旬	85～100	円錐(凹)

- (3) 「スプレーギク型」という呼称は最近の小ぎく品種における草姿上の特徴を表現するため、ここでは便宜的に用いた。供試品種を通じてその特徴をまとめると次の通りである。

花を着生する分枝の多くが主茎中位部より上から発生し、強勢長大な下位分枝はほとんどみられない。分枝長は長くても30cm程度で、その分枝配置や長さから品種特有の花房形を呈し、ほぼ、スプレーギクの花房形に準じて分類することができる。